

月刊 技術会議

www.s.affrc.go.jp

2004年
10月号

No. 40

農林水産省 農林水産技術会議

観賞用パインアップル
新品種「ナツヒメ」(3
ページ参照)

右端：果実の大きさ
・実の長さ約5cm
・径 3～4cm



巻頭言

ブランドニッポンとフランス料理

京都ホテルオークラ取締役総料理長

大庭 巖

研究開発をめぐる 最近の動き

農林水産省農作物命名登録で15作物26品種を登録

< p 3 >

科学技術関係予算改革の取り組み状況

< p 4 >

国際共同研究人材育成推進事業の派遣者決定

< p 4 >

農林水産技術会議会長と若手研究者との懇談会を開催

< p 5 >

水産総合研究センター研究成果発表会を開催

< p 6 >



ブランドニッポンとフランス料理

京都ホテルオークラ取締役総料理長
大庭 巖



農業は、いうまでもなく生命維持をサポートする基幹産業。生活に不可欠で、しかも安全な食材を安定的に継続供給する役目を負っている。「とにかく食べればよい」という時代は、少なくとも日本を含めた先進国ではとうに終わり、従って今や農業は単に栄養摂取のための餌作りではない。

一方、私たちのまわりからは、食卓を囲むという家庭の基本的な姿がどんどん少なくなっている。経済規模が拡大してその結果社会の労働力が不足したこと、消費促進の流れがかつてないほどになったこと、そういったことが家庭から家事専門家を奪っているように思える。歴史の中での食文化形成の中心的存在だった家庭は、都市部においてはいまや調理済み食品や給食を含めた外食産業にその地位を譲りつつあるといえまいか。外で働いた後に買い物をしてながら急いで家に帰り、食べるかどうか判らない家族のために食事の用意をすることが、いかに不自然かは明らかである。

食生活に見るこのような傾向は、これから益々加速度的に顕著になってゆくだろう。またブランドニッポンが象徴している優良生産物を以って日本人の食を、それも 100% 充足させるのは、コストパフォーマンスの観点から見てもむずかしい。有機・無農薬作物は理想的ではあるが、国産で国民の食をとっても賄えなからう。その点、外食産業の頂点の一つといえるフランス料理の世界では、ブランドニッポンは取り組みやすいのである。フランス料理の料理長が組織する日本エスコフィエ協会（NPO）では、現在、フランス料理の長所と問題点を科学的に解析すべく科学分析事業を行っている。近頃喧伝されているいわゆるヘルシーは、目に入りやすく耳に聞こえやすい偏った流行となっており、フランス料理のように外からはわかりにくい料理は、ど

うも旗色が悪い。フォンやフュメといっただし汁を用意するには肉や骨だけではなく、多くの野菜を必要とする。また最近ソースの基としたり、濃くなりすぎた物を薄めたりするのは、フォン・ド・レギューム、つまり野菜のだし汁を使っている。多くの抗酸化性物質は豊富に残留するにも関わらず、長時間の低温加熱の後、漉してしまうので痕跡が残らない。また、現在のカロリー表示は、ほとんどが調理前の材料の成分を加算しているの、フランス料理の調理過程で丁寧に行う脱脂作業による、著しいカロリー減少には目をつぶってしまっている。

フランス料理は非日常食の典型である。家庭では作らない、いや作れない。時折のハレの場で、心を癒す料理なのだ。このような状況のもとに安心して積極的に食べてもらえる「ブランドニッポン」を広めたい。トレーサビリティが確立し、気概を持った人たちが研究開発したこれらの食材から何かが生まれそうである。

先般、農業・生物系特定産業技術研究機構の紹介で紫サツマイモ（アヤマラサキ）のジュースを入手した。特徴をどのように生かすか、大変迷ったのである。鮮やかな色がシャーベットによからうかと、試作を重ねたが、味が今ひとつ。甘味を加減したり、リキュールを足したりしているうちに、傍にあった肝康酢が目に入った。結果は上々。味が締まり、素晴らしい物に仕上がった。試食の結果、製品化も実現することとなったのである。シャーベットは、コース料理を単位としているフランス料理のうちのデザートの一構成成分でしかない。しかし紫サツマイモの栄養的特性を活かせることができたことで、農業に魅力を感じる農業従事者に多少の希望と勇気を与えられたのなら本望。ブランドニッポンの可能性を見た気がしたのであった。



農林水産業に係る研究機関における最新の研究成果を広く知っていただくため、研究機関が新たに開発した食材を使い、一流シェフの手で素晴らしいフランス料理に仕立て、多くの皆様にご賞味いただく「ブランド・ニッポンを試食する会」を、2002年より開催しております。

今年は、帝国ホテルの協賛を得て開催する運びとなり、準備を進めております。概要は下記のとおりですが、時期が近くなりましてから改めてご案内申し上げます。

日 時：平成16年12月3日（金）12:00～14:00

参集者：150名程度

場所：帝国ホテル東京（光の間）

会費：10,000円

研究開発をめぐる最近の動き

平成16年度農林水産省農作物新品種命名登録(第1回)

- 15作物、26品種を命名登録 -

地域研究課

「農業試験研究独立行政法人等育成農作物新品種命名登録要綱」に基づき、平成16年9月30日付けで、15作物、26品種を新品種として命名登録しました。

水 稲

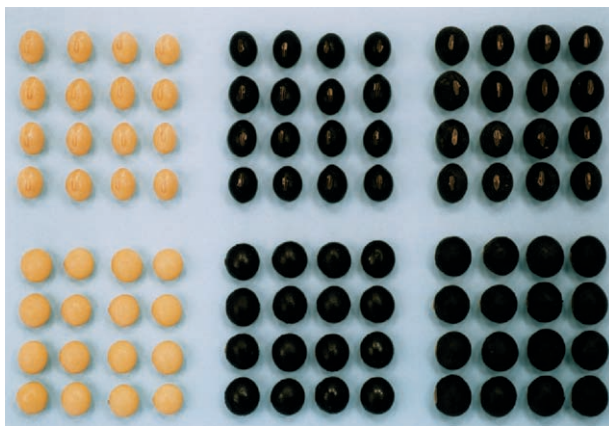
乾物収量が多く稲発酵粗飼料に適する早生品種「夢あおば」、直播栽培で安定して良質、多収の暖地向け品種「ふくいずみ」、収量性が安定している極良食味品種「イクヒカリ」、「コシヒカリ」のいもち病抵抗性同質遺伝子系統「コシヒカリ^{ビューエルイチゴウ}BL1号」等7品種

ばれいしょ

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性、そうか病抵抗性で調理特性に優れた生食用の中生品種「スノーマーチ」

大 豆

ダイズモザイク病抵抗性で納豆加工適性に優れる小粒品種「すずかおり」、暖地向けの煮豆用黒大豆品種「クロダマル」等3品種



左：フクユタカ 中央：クロダマル 右：新丹波黒

いちご

極めて食味が良く、果実の大きい四季成り性品種「なつあかり」等2品種

みかん

剥皮が容易、高糖度でオレンジ様の香気をもつ中生品種「たまみ」



四季成り性いちご品種「なつあかり」の着果状況

ぶどう

肉質が優れ良食味で、果皮色が紫色の大粒品種「オリエンタルスター」

チューリップ

病害抵抗性で球根生産性が高い、赤色系覆輪花色の晩生品種「春万葉」等2品種

えん麦

耐倒伏性が極めて強く、各種病害に抵抗性を有する「たちあかね」

この他にも、はとむぎ、かんしょ、あずき、さとうきび、メロン、パイナップル（グラビア参照）、チモシーの品種を登録しました。



パイナップル「ナツヒメ」(観賞用)

なお、詳細は農林水産技術会議事務局 ホームページのプレスリリース (<http://www.saffrc.go.jp/docs/press/2004/0930.htm>) で紹介しています。

総合科学技術会議で科学技術関係予算改革の取り組み状況を検討

技術政策課

9月9日に開催された第39回総合科学技術会議において、平成17年度概算要求に基づく科学技術関係予算改革の取り組み状況についての検討が行われました。

1 平成17年度科学技術関係概算要求の概要

平成17年度の科学技術関係概算要求額については、総額4兆111億円（対前年度比111%）であり、このうち重点4分野では、1兆570億円（対前年度比119%）、その他4分野では、1兆884億円（対前年度比93%）となっています。

また、農林水産省の科学技術関係概算要求額は、1,390億円（対前年度比117%）となっています。

今後の予定としては、科学技術政策担当大臣及び総合科学技術会議有識者議員による「優先順位付け（SABC等）」の結果の報告及び公表が10月中旬に予定されています。

2 科学技術連携施策群の創設・推進

前回の総合科学技術会議（平成16年7月23日開催）において、「総合科学技術会議は、国家的・社会的に重要であって関係府省の連携の下に推進すべきテーマを定め、関係府省とともに、テーマごとの関連施策等の不必要な重複を排除した上で、科学技

術連携施策群として積極的に推進する。」ことが決定されました。

今回は、「科学技術連携施策群」のテーマとして、①ポストゲノム－健康科学の推進－、②新興・再興感染症、③ユビキタスネットワーク－電子タグ技術等の展開－、④次世代ロボット－共通プラットフォーム技術の確立－、⑤バイオマス利活用、⑥水素利用／燃料電池、⑦ナノバイオテクノロジー及び⑧地域科学技術クラスターの8テーマに決定されました。

今後、優先順位付け等の過程で、不必要な重複排除・連携強化の点検を行いつつ、科学技術連携施策群に含める施策の決定及び施策群毎の重要度が決定されます。

3 競争的研究資金の改革の徹底及び重点的拡充

競争的研究資金については、その効果を最大限に発揮するための制度改革を推進しつつ、重点的拡充を図ることとされています。

競争的研究資金の平成17年度の概算要求額は、6,091億円（対前年度比169%、対12年度比205%）となっています。

また、農林水産省は、238億円（対前年度比236%、対12年度比292%）となっています。

「国際共同研究人材育成推進事業」の派遣者決定

国際研究課

近年では、バイオテクノロジー等先端的技术に端的に見られるように、世界各国が研究開発にしのぎを削る状況になっていますが、一方で、研究資源や最新の知見を持ち寄って国際共同研究を行うことが効率的な研究に必須ともなっています。加えて、今後の国際共同研究は、我が国がより主体的にイニシアティブをとって効率的・効果的に実施していく必要があります。

このような国際共同研究を行う研究者の育成を図るため、35歳以下の優秀な若手研究者を対象として

CGIAR等の国際農業研究機関での研究機会を提供する「国際共同研究人材育成推進事業」をJIRCASに委託して実施しています。

7月1日から30日にかけて募集を行ったところ、24名の応募がありました。CGIARの科学理事会の委員でもある貝沼圭二氏を選考委員会の議長として書類審査及び面接試験が実施され、最終的に11名の派遣者が決定されました。これら11名の者は来年2月末までの間に約2ヶ月間、世界8カ国、8カ所の国際農業研究機関に派遣されます。

「農林水産技術会議会長と若手研究者との懇談会」を筑波で開催

技術政策課
研究開発企画官室

8月27日（金）、農林水産技術会議筑波事務所で農林水産技術会議会長と若手研究者との懇談会が開催されました。4年目の今年も、農林水産試験研究に関係する8つの独立行政法人から10名の若手研究者が参加しました。

前半、若手研究者から自己紹介を兼ねた現在の研究内容の紹介と、独法中期目標・中期計画のあり方や、産学官連携等、研究開発システムについて日頃考えていることなどを交えた意見の発表がなされました。

続く討議の場では、研究開発システムのあり方について意見が交わされました。先ず会長から、現在の研究課題を選定した動機について質問があり、各人の入省時や異動時、組織の再編時での課題選定に当たって考えてきたことの紹介がありました。続いて、平成13年度の研究機関の独立行政法人化を境として、研究の取り組み方や考え方にどのような変化があったか等のやりとりがなされました。

研究開発システムに対する考え方では、業績評価に議論が集中しました。独法として業績評価の手法は共通する点が多いものの、運用や活用の仕方で異なる各独法の特徴が紹介されました。研究論文を重視する独法がある一方、所内の運営や社会貢献をも重視する独法があること、オールラウンド・プレーヤーとしての役割が自ずと期待される評価法を採用している独法や、特定の分野に関して秀でた業績



が期待される評価法を採用している独法があることなどが紹介されました。さらに、業績評価は評価の低い研究者に対して組織としてのサポート体制を整えるために活用されているという点も紹介されました。なお、各種評価に関わる事務量の多さや、年度ごとの評価の煩雑さ、育児休業等長期にわたって研究に携われない場合の扱いなどの改善要望が出されました。

予算面では、競争的資金に代表されるプロジェクト研究の課題数・資金量が増える一方、経常的な研究費が削減される中で、委託研究資金の支出できる期間が短いことによって、年間を通した研究の推進上、支障が出ている点も指摘されました。

最後に会長から、異分野の方々との研究交流について質問が出されました。これについては、研究者個人のネットワークに依存している現状から組織的対応へと移行する必要性が意見として出されました。また、外国の特定のフィールドで複数分野の研究者による共同研究を行っているケースや、留学を契機とした海外の研究者との共同研究など、より広い活動がそれぞれの研究の幅を拡げるとともに、パートナーからの評価が研究者自身にとって大きな支えとなっていること等が紹介されました。



水産総合研究センター研究成果発表会を開催

技術政策課

平成16年9月14日に、「海の科学、最前線」と題された水産総合研究センター第2回成果発表会が、8月1日にセンター本部が移転した場所にほど近い、横浜みなとみらいのパシフィコ横浜で開催されました。水産総合研究センターから、マグロやマアジの資源研究、サンゴの生態研究などの成果6題について、来賓と多数の市民からなる約220名の聴

衆に対し成果を報告し、質疑応答がありました。また成果発表会に合わせて近くの棧橋で、先月代船建造されたばかりの調査船「北光丸」(902トン)が一般公開され、こちらにも480名の見学者が詰めかけ、最新の調査機器や設備を搭載した船内を見学していました。



みなとみらいの棧橋で一般公開された“新”北光丸



国際コメ年行事の一環である「世界イネ研究会議」の準備も着々と進んでいます。ポスター(右)もできあがりしました。

11月4日赤坂プリンスホテルにて開会式典と記念講演、5～7日はつくば国際会議場にてつくばシンポジウムが開催されます。詳細は下記のホームページをご覧ください。

<http://www.jircas.affrc.go.jp/seminar/WRRC2004/>



技術会議審議概要

平成16年度第6回農林水産技術会議の概要

- 日 時 平成16年9月21日(火) 15:00～17:00
- 場 所 農林水産技術会議委員室
- 出席者 齋会長、佐々木委員、北里委員、貝沼委員
西川事務局長、宮崎研究総務官、石毛研究総務官、飯田総務課長 ほか

- 議 題
- (1) 平成17年度科学技術関係予算の概算要求について
 - (2) 平成15事業年度における独立行政法人評価結果
 - (3) 独立行政法人見直しの検討状況について
 - (4) アグリビジネス創出フェアの準備状況について
 - (5) 世界イネ研究会議の開催について
 - (6) 農林水産研究開発レポートについて - 「食料・環境問題の解決を目指した国際農林水産業研究」
 - (7) カルタヘナ法に基づく遺伝子組換え生物等の拡散防止措置の確認等について
 - (8) 研究基本計画検討専門委員会の検討状況について
- 配布資料
- 資料1-1 平成17年度科学技術関係予算の概算要求について
 - 資料1-2 平成17年度科学技術関係予算の概算要求に係る参考資料
 - 資料2 独立行政法人の業務の実績に関する評価結果について
 - 資料3-1 独立行政法人の中期目標期間終了時の前倒しについて（スケジュール）
 - 資料3-2 中期目標期間終了時における独立行政法人の組織・業務全般の見直しについて（抜粋）
 - 資料3-3 経済財政運営と構造改革に関する基本方針2004（抜粋）
 - 資料3-4 新たな行政改革大綱に向けて与党申し入れ（抜粋）
 - 資料3-5 独立行政法人に関する有識者会議について
 - 資料3-6 農林水産技術会議所管の独立行政法人の事務及び事業に関する見直し
 - 資料4 アグリビジネス創出フェアの準備状況について
 - 資料5 世界イネ研究会議の開催について
 - 資料6 農林水産研究開発レポート「食料・環境問題の解決を目指した国際農林水産業研究」
 - 資料7 カルタヘナ法に基づく遺伝子組換え生物等の拡散防止措置の確認等について
 - 資料8 農林水産研究基本計画（仮称）の検討状況について

議事概要

（1）平成17年度科学技術関係予算の概算要求について

農林水産省における科学技術関係予算の概算要求の概要について、報告された。

（2）平成15事業年度における独立行政法人評価結果

独立行政法人通則法に基づき実施された、平成15事業年度の業務に関する実績評価について、その概要が報告された。

【主な意見等】

○独立行政法人に対する評価はホームページ等で公開されているが、評価を受けた各独立行政法人の見解等については、統一的に公開するような仕組みになっていない。今後は、評価について各独立行政法人の見解、対応状況などを社会に対して分かり易く公開していくことも検討すべきではないか。

（3）独立行政法人見直しの検討状況について

独立行政法人の中期目標期間終了時の見直しの前倒しについて、経緯、スケジュール等が報告された。

【主な意見等】

○各省横断の論理という横の軸がある一方で、他の分野と異なり、行政と密接に取り組まれてきた農林水産研究の特徴という縦の軸もある。諸外国でも、農林水産研究は公的部門が多くを担っており、このような事例も示しながら、複数の軸で立体的に議論していくことが必要。

（4）アグリビジネス創出フェアの準備状況について

本年10月14日及び15日に開催されるアグリビジネス創出フェアの準備状況について、報告された。

【主な意見等】

○最近、このようなフェアが数多く開催されているが、全てに出展していくのは大変。参加する側としては、整理して頂く方がよい。

○このアグリビジネス創出フェアが、農林水産分野の産学官連携の旗印として全国的にメインのイベントであり、今後も毎年継続して開催していくことなどを世の中の人に認識してもらうように説明していく必要がある。

○参加費や出展用のブースの借料が無料といった魅力的な点も、もっとアピールする必要がある。

（5）世界イネ研究会議の開催について

本年11月4～7日に開催される世界イネ研究会議のプログラム等について報告された。

（6）農林水産研究開発レポート「食料・環境問題の解決を目指した国際農林水産業研究」について

平成16年度第1回農林水産技術会議で発刊が決定された農林水産研究開発レポートのうち、「食料・環境問題の解決を目指した国際農林水産業研究」がとりまとめられ、審議の上、了承された。

【主な意見等】

○省内や独法などの関係者だけでなく、多くの人に見て貰うようにしないといけない。特に、専門分野が異なるが食料・環境問題に触れた話をする機会

のある人や一般の人といった食料・環境問題に関心のない人でも見るように配布先を検討してほしい。

(7) カルタヘナ法に基づく遺伝子組換え生物等の拡散防止措置の確認等について

「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」(カルタヘナ法)に

基づき、遺伝子組換え生物等を拡散防止措置を講じて使用する場合(第2種使用等)における具体的な確認等の仕組みについて報告された。

(8) 研究基本計画検討専門委員会の検討状況について

現在策定を進めている研究基本計画について、検討状況が報告された。

Information お知らせ

記者発表

発表年月日	発表事項名	担当課
16. 9. 15	クローン牛の異動報告のとりまとめについて(H16. 8. 1～8. 31)	技術安全課
16. 9. 24	生物多様性影響評価検討会総合検討会の開催及び傍聴について	技術安全課
16. 9. 24	平成16年度「農林研究の歳時記」の配布について	筑波事務所
16. 9. 30	平成16年度農林水産省農作物新品種命名登録(第1回)について	地域研究課

今後の予定

年 月 日	行 事 名	開催場所	担当課
16. 10. 12	平成16年度都道府県農業関係試験研究主務課長・場長会議	農林水産省	地域研究課
16. 10. 14 ～15	アグリビジネス創出フェア	東京国際フォーラム	先端産業技術研究課
16. 10. 18	第8回研究基本計画検討専門委員会	農林水産省	研究開発企画官室
16. 10. 18	近畿中国四国地域研究成果発表会	広島県福山市	技術情報室
16. 10. 19	第7回農林水産技術会議	広島県福山市	総務課
16. 10. 19	九州沖縄地域研究成果発表会	沖縄県那覇市	技術情報室
16. 10. 21	北陸地域研究成果発表会	新潟県上越市	技術情報室
16. 10. 27	北海道地域研究成果発表会	北海道旭川市	技術情報室

編集後記

巻頭言では、小泉総理も出席された2002年の第1回「ブランドニッポンを試食する会」(ホテルオークラ東京)で腕をふるわれた大庭氏にお願いした。大庭氏は、新たな食料・農業・農村基本計画の策定に向けて現在進められている食料・農業・農村政策審議会の委員としても活躍され、ご多忙中にもかかわらず快く引き受けていただいた。「ブランドニッポンを試食する会2004」の日程も決まり、使用するブランドニッポン食材、メニューもほぼ決まったと聞く。一般からの参加も募集する予定で、期待が高まる。

月刊 技術会議 No.40 平成16年10月1日

編集・発行 農林水産省農林水産技術会議事務局 技術政策課 技術情報室

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

T E L : 03-3501-9886

e-mail: koho@s.affrc.go.jp

農林水産技術会議事務局ホームページ <http://www.s.affrc.go.jp/>